

三重県沖で新たに漁獲されたウシマンボウと そのマスメディア報道について

澤井悦郎^{1,2}

¹ 〒 639-0200 奈良県北葛城郡上牧町 マンボウなんでも博物館

² 〒 684-0016 鳥取県境港市花町 8-1 海とくらしの史料館

はじめに

マンボウ属 *Mola* はフグ目マンボウ科 Molidae に属し、世界中の温帯・熱帯海域に広く分布する大型魚類である (Sawai et al., 2017). 日本近海に出現するマンボウ属魚類は、ウシマンボウ *Mola alexandrini* (Ranzani, 1834) とマンボウ *Mola mola* (Linnaeus, 1758) の2種のみが確認されており、両種は長い間混同されてきた歴史をもつことから、両種を明確に識別したデータを蓄積することが求められている (例えば、澤井, 2017).

このたび、2024年5月末に三重県尾鷲市沖で中型のマンボウ属1個体が漁獲された。本個体の漁獲動画はX (旧 Twitter) 上で14000件以上リポストされ、複数のマスメディアによっても取り上げられたことで、インターネット上で大きな話題となった (例えば、FNN プライムオンライン, 2024; キクチ, 2024; 名古屋テレビ放送, 2024; 兎耳山, 2024). しかしながら、これらマスメディアの記事に書かれた情報と本研究で調査して得られた情報にはいくつか相違があり、また本個体には個体変異と考えられる形態的特徴が確認されたため、それらについてここで議論・報告する。

材料と方法

本研究で調査したマンボウ属1個体 (Figs. 1-2) の動画・画像 (動画から切り出された写真) や情報は謝辞に記した情報提供者から得られ、動画・画像は形態や行動の観察に使用した。本個体

は2024年5月27日に三重県尾鷲市行野浦沖に設置された定置網 (34°03'47.9"N, 136°15'36.7"E) によって漁獲されたが、漁船で持ち帰るには大き過ぎたため海に戻された。本個体は直接計測されていないが、動画上に映っていた漁師の左手の横幅とのスクリーンショット画像上での対比から、全長195-200 cmと推定された。本個体の種同定はSawai et al. (2017), 澤井 (2021a) にしたがった。本個体の漁獲日の海面水温は、三重県水産研究所 (2014-2024) の漁海況のページにある漁獲現場に近い「九鬼定置」のデータから引用し、19.7°Cであった。

結果と考察

種同定と形態観察 本研究で調査したマンボウ属1個体 (Figs. 1-2) は、外部形態からマンボウ属の種同定が可能な体サイズに達しており、下顎下部がわずかに隆起していること (Fig. 1A 太い矢印)、舵鰭縁辺部は半円形で明瞭な波型がないこと (Fig. 1B 太い矢印)、胸鰭より後方の体表に頭尾方向の盛り上がったシワがないこと (Fig. 1A 黄色の囲み) からウシマンボウと同定された (Sawai et al., 2017; 澤井, 2021a)。また、漁獲時のウシマンボウはマンボウより体表面上の白いまだら模様が明瞭で視認しやすい傾向が示唆されていることも本同定を支持する (Figs. 1-2; 澤井, 2021a)。

一方、本個体の舵鰭縁辺部の腹側には何らか

Sawai, E. 2024. Newly caught *Mola alexandrini* (Molidae) off the coast of Mie Prefecture and its mass media coverage. *Nature of Kagoshima* 51: 35-38.

✉ ES: Ocean Sunfishes Information Storage Museum, Kanmaki-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 639-0200, Japan (e-mail: sawaetsu2000@yahoo.co.jp).

Received: 13 June 2024; published online: 14 June 2024; https://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_051/051-008.pdf

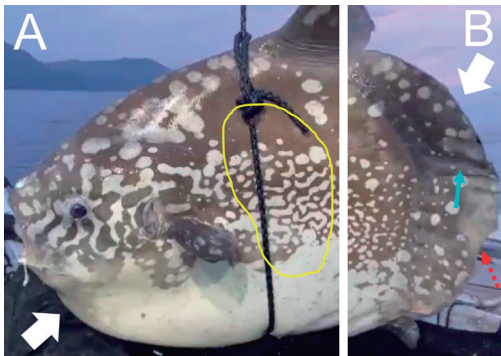


Fig. 1. An individual of *Mola alexandrini* (195–200 cm estimated total length) captured by a set net off Yukunoura (34°03'47.9"N, 136°15'36.7"E), Owase-shi, Mie Prefecture, Japan, on 27 May 2024. A: anterior part of body. B: posterior part of body. Thick arrows and yellow enclosure: diagnostic characters for the species provided by Sawai et al. (2017) and Sawai (2021a). Thin arrow: smooth band back-fold. Dashed arrow: scar that appears to be bite mark of a predator. Photographs by Hashisashoten.

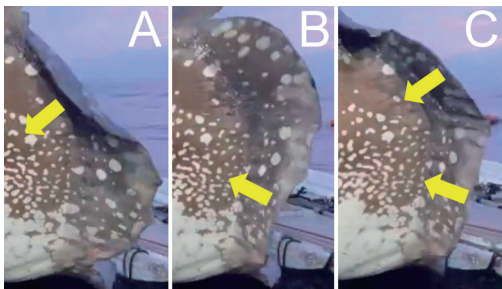


Fig. 2. Folding movement of the clavus of *Mola alexandrini* (same individual as in Fig.1) with the smooth band back-fold as boundaries. A: folding of the dorsal side (upper part) of the clavus. B: folding of the ventral side (lower part) of the clavus. C: folding of both dorsal and ventral sides of the clavus. Arrows: folding direction. Photographs by Hashisashoten.

の捕食生物に齧られたような凹みがある (Fig. 1B 破線矢印)。このような形態異常の舵鰭を持つウシマンボウは先行研究 (例えば, 澤井ほか, 2019) でも確認されている。

また, 日本近海では記録されていないカクレマンボウ *Mola tecta* Nyegaard et al., 2017 は舵鰭中央部に後延帯 (smooth band back-fold) を特徴的に有しているが (Nyegaard et al., 2017; 澤井, 2019), ウシマンボウやマンボウの中にも稀に舵鰭中央部に後延帯を持つ個体は確認されており (Nyegaard et al., 2017; Sawai et al., 2017), 本個体の舵鰭中央部にも後延帯が確認された (Fig. 1B 細い矢印)。後延帯を持つウシマンボウやマンボ

ウの個体変異がどの程度の頻度で存在するのかについては, 今後調査が必要である。

本個体が舵鰭を左右に動かすと, 後延帯を境界として舵鰭の背側 (上半分) と腹側 (下半分) が個別または同時に内側に折れ曲がるのが観察された (Fig. 2)。また, 舵鰭を少し波打たせる (ひねる) ような動きも観察された。カクレマンボウは後延帯で分割された舵鰭 (引用した記事では flap) の背側と腹側をそれぞれ独立して動かせることが確認されている (Barakett, 2024)。今回, 水の影響がない船上で縄に吊り下げられた状態で, 後延帯で分割されたウシマンボウの舵鰭が背側と腹側でそれぞれ独立して動くところをおそらく初めて観察できたことは, マンボウ属の舵鰭が背鰭の変形した一部と臀鰭の変形した一部で形成されているという先行研究の結果 (例えば, Nakae and Sasaki, 2006) を鰭の動きの面からも支持する。

三重県における記録と水温 筆者が知る限り, 三重県におけるウシマンボウの記録は, 藤原 (2020) による誤同定を含めて今までに 9 個体確認されており (澤井, 2021a; 澤井・杉山, 2021a, b), 本個体 (Figs. 1–2) が 10 個体目となる。これまでに知られている三重県におけるウシマンボウの出現時期は 1–3 月と 5 月 (澤井, 2021a; 澤井・杉山, 2021b), 出現海面水温は 16.4–19.6 °C である (澤井, 2021a)。本個体の出現場所・時期・水温・体サイズは澤井 (2021a) で調査されたウシマンボウ個体の結果と非常によく似ていた。三重県におけるウシマンボウの出現状況を詳細に知るためには, 今後も情報を蓄積していく必要がある。

マスメディアによる報道との相違 本個体は X 上に投稿された動画が大規模拡散された後, その反響に興味を持った複数のマスメディアによっても様々な媒体で報道された。そのうち, 筆者が報道内容を記事として確認できたのは 4 社 (FNN プライムオンライン, 2024; キクチ, 2024; 名古屋テレビ放送, 2024; 兎耳山, 2024) である。これら 4 社はすべて『マンボウ』として本個体を報道したが, 本研究の同定結果はウシマンボウであった。また, 本個体の体サイズについて, FNN

プライムオンライン (2024) は「推定 3 m」、名古屋テレビ放送 (2024) は「体長 3 m ほど」と報道したが、本研究の調査結果は推定全長 195–200 cm であった。

全長 2 m 前後のウシマンボウは頭部と下顎下部の隆起が発達途上で目立たないため、マンボウ科の他種と混同されやすい (澤井, 2021a)。また、ウシマンボウの知名度がマンボウより低いことも、『マンボウ』として報道された要因として挙げられる。一方、マスメディアの使う『マンボウ』は種 (*M. mola*) を指しているのか、マンボウ型魚類という意味での総称を指しているのかが不明瞭であり、混乱が生じる場合がある。マスメディアでは一般的に種が不明な場合でも「マンボウ属」といった専門的となる表記の使用を避けるため、種と総称を区別する表現方法を考案する必要がある。この問題の 1 つの解決策として、同じ記事の中で種の和名と総称を使う場合、種か総称どちらか一方の呼び名に、括弧などの記号を用いて区別することを提案する：例えば、『マンボウ』。もしくは「メダカ」の事例のように (小林・北川, 2020)、将来のマンボウ属の分類で種が分かれた際に、マンボウの標準和名を破棄することが提案される。

全長 3 m 前後のウシマンボウは頭部と下顎下部の隆起がよく発達しているため、全長 2 m 前後のウシマンボウと違い外観的にマンボウと識別しやすい (Sawai and Nyegaard, 2022)。本個体の体サイズがマスメディアによって「3 m」と報道されたのは、おそらく取材した漁師が目視によって感覚的に推定した体サイズをそのまま報道に使ったからだと思われる。名古屋テレビ放送 (2024) の表記では推定値か実測値か不明瞭であるため、実測値でない場合は FNN プライムオンライン (2024) のように「推定」と明記することが推奨される。マスメディアは世界中から情報を収集できる点で非常に有用であるが、マスメディアが報道したマンボウ属大型個体の全長や体重の数値を後から調査直すと実際は計測されていなかったという事例がこれまでも多数確認されており (澤井, 2021b; Sawai and Nyegaard, 2022)、マ

メディアの情報を学術的なデータとして使用する場合は科学者側が気を付けて情報の出所まで確認する必要がある。

そもそもマスメディアの報道は幅広い視聴者・読者への速報性、話題性、可読性を重視するため、一般的に情報の正確性は科学者が求めるものより低くなる (保坂, 2004; 大石, 2009)。またマスメディアの報道は時間と文字数の制限があるため、情報を簡略化した誇張表現になる場合も多く、それが原因でマスメディアと科学者の間で軋轢が生じることも少なくない (保坂, 2004; 大石, 2009)。マスメディアと本研究の間で生じた本個体の種同定と体サイズの相違にも、双方の情報に対する捉え方の違いがあらわれているものと考えられる。マスメディアの情報は未来に残す記録としての価値もあり、情報の正確性は高いことが望ましいが、マスメディアが情報発信する目的や対象は科学者の求めるものと異なり、両者の相違をなくすことは難しいと思われるため、情報を利用する側がその正確性を再検討することを視野に入れておく必要がある。

謝 辞

本研究を取りまとめるにあたり、本研究に使用したウシマンボウの動画・画像や情報は、松島定置および有限会社はし佐商店から提供していただいた。以上の方々には心から厚く御礼申し上げる。

引用文献

- Barakett, E. 2024. A giant 'sunbathing' fish that washed ashore in Oregon turned out to be an unexpected oddity. NBC News (updated 12 June 2024). <https://www.nbcnews.com/science/science-news/giant-sunbathing-fish-washed-ashore-oregon-turned-unexpected-oddity-rena156328> (13 June 2024)
- FNN プライムオンライン. 2024. 「10 年の漁師生活で初」三重・尾鷲で推定 3 m 超巨大マンボウを水揚げ...SNS で 250 万再生 下関ではクラゲ食べる珍光景. FNN プライムオンライン (2024 年 6 月 2 日付). <https://www.fnn.jp/articles/-/707267> (13 June 2024)
- 藤原昌高. 2020. ぼうずコンニャクの全国 47 都道府県うますぎゴーゴー! : 水産物研究家が市場巡りで見つけた全国のうますぎ店. マイナビ出版, 東京. 237 pp.
- 保坂直紀. 2004. 新聞における科学記事, pp. 273–294. ミューズ (編) 総合研究大学院大学湘南レクチャー (2003) 講義録 : 科学における社会リテラシー 1. 総合研究大学院大学教育研究交流センター, 神奈川.

- キクチタイスケ. 2024. 水族館で人気の『あの生き物』漁で吊り上げられた衝撃の姿に「初めて見た...」. Grape (2024年6月2日付). <https://grapee.jp/1626972> (13 June 2024)
- 小林牧人・北川忠生. 2020. 日本のメダカの種類と標準和名について. 比較内分生物学, 46: 23.
- 三重県水産研究所. 2014-2024. 漁海況インデックス. <https://www.pref.mie.lg.jp/suigi/hp/84510017153.htm> (13 June 2024)
- 名古屋テレビ放送. 2024. 「正直ぞっとしたね」体長3mほどの巨大マンボウ 漁船の定置網にかかる 三重. メ〜テレ (名古屋テレビ) (2024年5月31日付). <https://www.nagoyatv.com/news/?id=024563> (13 June 2024)
- Nakae, M. and K. Sasaki. 2006. Peripheral nervous system of the ocean sunfish *Mola mola* (Tetraodontiformes: Molidae). Ichthyological Research, 53: 233-246.
- Nyegaard, M., E. Sawai, N. Gemmell, J. Gillum, N. R. Loneragan, Y. Yamanoue and A. Stewart. 2017. Hiding in broad daylight: molecular and morphological data reveal a new ocean sunfish species (Tetraodontiformes: Molidae) that has eluded recognition. Zoological Journal of the Linnean Society, doi: 10.1093/zoolinnean/zlx040 (July 2017), 182: 631-658 (Mar. 2018).
- 大石かおり. 2009. 科学技術報道における研究者と報道者のディスコミュニケーション. 早稲田政治経済学雑誌, 373-374: 54-71.
- 澤井悦郎. 2017. マンボウのひみつ. 岩波書店, 東京. 208 pp.
- 澤井悦郎. 2019. マンボウは上を向いてねむるのか: マンボウ博士の水族館レポート. ポプラ社, 東京. 207 pp.
- 澤井悦郎. 2021a. 写真に基づく三重県初記録のウシマンボウ, およびマンボウ属の新たな分類形質. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 8: 31-36.
- 澤井悦郎. 2021b. 写真に基づく福井県初記録のウシマンボウ. Nature of Kagoshima, 48: 119-122.
- Sawai, E. and M. Nyegaard. 2022. A review of giants: examining the species identities of the world's heaviest extant bony fishes (ocean sunfishes, family Molidae). Journal of Fish Biology, 100: 1345-1364.
- 澤井悦郎・瀬能 宏・竹嶋徹夫. 2019. 神奈川県立生命の星・地球博物館に展示されていたウシマンボウの剥製標本. 神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), 48: 37-42.
- 澤井悦郎・杉山弘樹. 2021a. 志摩マリンランドにおけるヤリマンボウの希少な飼育記録. Nature of Kagoshima, 48: 61-65.
- 澤井悦郎・杉山弘樹. 2021b. マンボウ科 (ヤリマンボウ, ウシマンボウ) とコバンザメ科 (ナガコバン属) の共生関係に関する一考察. Nature of Kagoshima, 48: 79-82.
- Sawai, E., Y. Yamanoue, M. Nyegaard and Y. Sakai. 2017. Redescription of the bump-head sunfish *Mola alexandrini* (Ranzani 1839), senior synonym of *Mola ramsayi* (Giglioli 1883), with designation of a neotype for *Mola mola* (Linnaeus 1758) (Tetraodontiformes: Molidae). Ichthyological Research, doi: 10.1007/s10228-017-0603-6 (Dec. 2017), 65: 142-160 (Jan. 2018).
- 兎耳山明依. 2024. 三重県沖であがった“巨大マンボウ”に漁港騒然…… 人間とサイズ比較した驚愕の光景に「でっか!!」「口から何か出てますね」。ねとらぼ (2024年6月8日付). <https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/2406/08/news010.html> (13 June 2024)